

確かな国語の力をつけるために

東京女子体育大学助教授 田中 洋一 たなか よういち

一 はじめに

現行の学習指導要領による教育が全面実施されて三年が経過した。この間、学習指導要領は部分改訂されたが、その趣旨は変わっていない。そこで目ざしている学力を象徴する言葉は「生きる力」である。この「生きる力」の意味するところについては、すでに議論が尽くされていると思うので、ここでは触れない。しかし、「生きる力」の育成のためには、「生徒の主体的な学習活動」を実現し、「基礎・基本が身につく学習内容」を提供することが必要であることは異論のないところであろう。18年度版教科書はこのような条件にこたえられるよう編集したものである。ここでは、その意図するところを、第二学年の教科書を例にあげながら、説明していきたい。

二 学習の全体が見通せる構成

中学生を対象とした教科に関する調査は多いが、そのほとんどで彼らは国語を好きな教科として位置付けていない。その理由の一つに、国語という教科の学びにくさがあげられている。「何をどう勉強してよいかわからない」「学習しても力がついたのか実感できない」という声は実際に多い。したがって、定期考査の前でも、国語

の学習にはあまり時間が割かれていない。このような課題に対応するために、18年度版教科書では、生徒が明確な目的をもって学習に取り組み、はつきりとした道筋をたどって思考し、その成果について成就感をもてる学習になるように工夫を凝らしている。

まず、巻頭に「学習の計画を立てよう」(紙面 参照)のページを設け、単元ごとに「単元目標」と「学習の目標・内容」を示している。例えば、「盆土産」「字のないはがき」の文学的な文章二編を中心に構成されている第三単元では、「情景や心情の描写をとらえ、作品を味わう」ことが目標である。また、「人物それぞれの人柄や思いをとらえる」「描かれている優しさや温かさなどを読み味わう」など、五つの「学習の目標・内容」を示している。文学的文章を教材とする学習で、いつも教えられるもののすべてを教えるというのではなく、二年間を通した綿密な指導計画に基づき、各単元ごとに焦点化した学習が行えるよう工夫しているのである。

なお、この「単元目標」は、各単元の扉(紙面 参照)でも繰り返し示し、新しい単元の学習に臨む生徒が目標をはっきり理解できるよう配慮している。これによ

り、生徒はその単元で学ぶことを明確に意識し、学習への心構えをもつことができる。また各教材の後に置かれた「学習」のページ(紙面 参照)では、教材ごとの目標と学習課題を示している。「学習」の課題に沿って学習を進めることで、単元の目標が達成されるように構成している。

さらに、その単元や教材でのねらいを主たる学習活動を通して修得するためのポイントを「学習の窓」で取り立てて明示している。例えば、詩と文学的文章で構成されている第一単元には、「情景描写に着目する」という見出しで、次のような内容の学習の窓を設けている。(紙面 参照)

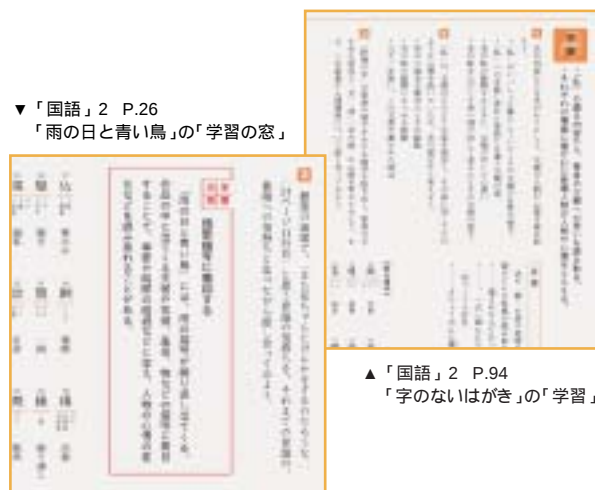
『雨の日と青い鳥』には、雨の描写が繰り返し出てくる。作品の中に出てくる天候や気候、風景、物などの描写に着目することで、季節や時間の経過などに加え、人物の心情の変化などを読み取れることがある。

このような簡潔な内容であるが、単元や教材の目標達成のために必要な文章の読み方の一例を示しているのである。目標を達成するための具体的な手立てを理解することを通して、生徒は学習の方法を身につけることができる。それは直接、生徒の国語力を向上させることにつながる。また、

▼「国語」2 P.75「第3単元扉」



▲「国語」2 P.94
「字のないはがき」の「学習」



▼「国語」2 P.8-9「学習の計画を立てよう」



生徒が学習で何を身につけたのかを振り返るときにも、「学習の窓」はたいへん有効であると考えている。

これらの工夫により、生徒は予習や復習も含めて、いつも視界良好な状態で学習を進めることができる。このような学習への取り組みやすさが、生徒の学習意欲を刺激し、高めることにつながると考えている。

三 言語生活に生かせる表現の教材

「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習については、そのための独立した教材を設けている。これらの教材には、「目標」と「学習の見通しをもと」という欄を設け、学習活動の流れを明らかにしている。

例えば、「提案のしかたを工夫しよう」プレゼンテーション」の教材(紙面 参照)では、目標を「伝える目的に応じて情報を検索したり、選択したりする。」「資料のあつかい方や話の構成を工夫して、効果的に伝える。」としている。これにより生徒は、ここの学習の中心が、事前の情報収集や整理と、プレゼンテーションの二点にあることを理解することができるよう。また「学習の見通しをもと」では、見つける・集める・深める・整理する まとめる・伝える合う 振り返る という四段階の中

(紙面 参照)

このように、表現学習を単に活動を経験することのみに終わらせず、その手順や留意点を十分理解させることができるように設定しているので、学んだことを日常生活や他教科、「総合的な学習の時間」などでの表現活動に生かすことができる。これは、「基幹教科としての国語」への期待にこたえるための工夫である。

四 単元の学習でも単体としての扱いでも教材を活用できる構成

18年度版教科書では単元の構成を吟味し、一つ一つの単元の要素を精選してある。一学期に学習する単元は一つの領域で単元を構成し、特に、基礎・基本が効率よく身につけられるよう、領域の焦点化を図られている。二丁三学期にかけては複数の領域の教材を組み合わせて単元を構成している。

また言語教科としての国語科の目標に沿って、三学期には「言葉と人とのかわり」を考える単元」を設定している。

今、中学校の先生方はたいへん多忙である。学校が小規模になる中で、選択教科が拡充され、「総合的な学習の時間」の実施にも準備が必要である。このような状

で、七つの学習活動をあげている。生徒には、どのような手順でプレゼンテーションを実施すればよいのかが一目瞭然となっている。これらをすべて、教材冒頭のページに明示してあるので、生徒は、これから始まる学習の意味や要点を、学習のスタートの時点で理解することができるのである。

また、教材の最後には、「次へつなげよう」の欄(紙面 参照)を設け、生徒自身が学習の成果を振り返ることができるようにチェックポイントを示している。これは、学習で得た事柄を確実に定着させるための有効な手立てであると考えている。さらに、「テーマ例」も示し、生徒が自発的に応用・発展させて取り組めるよう配慮している。これらは選択教科国語の中で活用することも可能である。

巻末資料では、「学習を広げる」として各単元や教材に対応した学習のまとめと、発展的な学習内容を示している。例えば、「伝え合うために」と題して、第二学年で学習した「話すこと・聞くこと」「書くこと」の要点を整理している。また「発想を広げる」と題して、スピーチや書くことの素材発見の手助けになる表現テーマ例を提供するなど、表現に関する内容だけで、四項目八ページにわたって整理している。

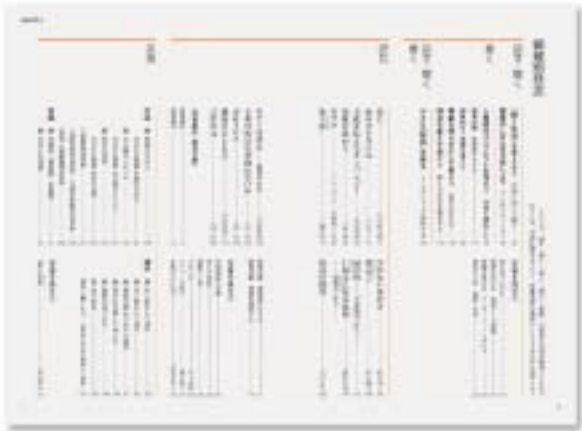
況の中で、指導計画を立案する先生方のお役に立つよう配慮している。具体的には学習内容の関連性や系統性を十分考えて単元構成と教材配列に工夫し、学習指導要領に示された目標を順次達成できるよう工夫している。この教科書どおりに授業を進めていただければ、生徒が学習を進めるにしたがい、無理なく国語の力をつけられるように構成されているのである。

もちろん、生徒の実状や学校の方針、また、他教科や「総合的な学習の時間」との相互連携によって指導計画は立案されるので、単元を外して、教材を単体として扱ったり、教材の組み替えを行ったりするなど柔軟な扱いが可能であるよう、充実した教材を用意すると同時に、教材ごとの目標を明示しているのである。

先生方が独自の指導計画を立案する場合に有効なように、目次の後に領域別目次(紙面 参照)を作成してある。ご活用いただければ幸いです。

田中洋一(たなか よういち)

一九五四年生まれ。東京都公立中学校教諭、教育委員会指導主事・指導室長を経て、現在、東京女子体育大学助教授。主な著書に、『中学校新国語科の授業モデル』(河野庸介編著、明治図書)。『中学校国語科週3時間の授業に対応した授業プラン集』(河野庸介編著、明治図書)などがある。光村図書中学校国語教科書編集委員を務める。



▲「国語」2 P.6-7「領域別目次」

▼「国語」2 P.222-223
「資料の工夫」



▲「国語」2 P.216-217
「伝え合うために」



▲「国語」2 P.104
「次へつなげよう」



▲「国語」2 P.98
「提案のしかたを工夫しよう」